

キリスト者にみる日本への目

——矢内原忠雄を場として——

大 濱 徹 也

一 敗戦の秋

敗北、一九四五年八月十五日の「終戦」を告げる玉音放送にどう向き合うかは、戦後日本がめざす国家のかたちを問う上で、日本国民が負うべき課題でした。しかし何人の日本国民が「国敗れたり」という痛恨の思いを己が肉体に刺さった棘と自覚していたでしょうか。

日本国民の多くは、「国敗れた」という現実よりも、生き残ったという感情にうながされ、ホットし、電燈が明るく照らす夜を迎えられる喜びにひたったのです。そのなかで林達夫は「滂沱の涙」が流れ出たと語っています。林は、戦争に奔る国家の在りかたを批判する言論をなした知識人、時代の闇を撃つ発言をした思想家。その人物が「敗北」という現実には涙しております。

治安維持法によって獄屋に囚われた社会学者天達忠雄は、

「戦いに破れし国の行末に思ひ乱れて夜もすがら寝ず」と、己が心情を歌っています。国の「行末」への思いは、二重橋の前にひざまづいて泣いた「赤子」たる民衆の心に共鳴しうるものを、一知識人として身につけていたことをうかがわせます。こうした敗戦体験には、大東塾の主宰者影山庄平と塾生が集団自決した精神の底流に通じあう世界、国家の明日を真摯に問い質そうとの志が読みとれるのではないのでしょうか。

しかし日本の知識人の多くは、「終戦」という解放感に酔い痴れ、国敗れたという現実には思っていたことをしておりません。そのため敗北を凝視するなかに明日の歴史を構築する場を提起しえなかったのです。この間にあって、日本と日本人とは何かを問ひかけ、あるべき国家国民のありかたを敗戦国民につきつけたのは一群のキリスト者でした。それは日本キリスト者として愛国の至情にはかなりません。

思うに戦中の国体論者が己が生きる場を喪失し、蟄居はたまた自裁においこまれるなかで、内村鑑三につらなるキリスト者は己が信仰の証として日本国民たる誇りを問いかけたのです。新生東京大学の総長南原繁と矢内原忠雄は、国敗れた日本の現実を直視し、何故敗北したかを説き、明日の日本像を提示しております。

南原と矢内原は、日露戦争勝利の余映を一身に浴び、「大国民」としていかに生きるかを第一高等学校で新渡戸稲造校長に学び、内村鑑三が説くキリスト教信仰を一身に受けとめた者です。戦後日本は、新渡戸―内村の下に育ち、官界や学界に己の場を占めた者により主導されました。新しい国民創出の使命を担う教育改革は前田多門、南原繁等が先導し、象徴天皇への道を開く宮中改革は田島道治の働きに負うものです。

日本におけるキリスト者の存在は、キリスト教を国体に合わせるものとなし、社会の鬼子とみなされてきました。この「鬼子」につらなるものが戦後日本のある核を担い、新日本建設の活力として働いたのです。その働きは、国体信仰を宗とする神社界が「国家の宗祀」というイデオロギーの崩壊による流砂にあえぎ、新しき方途を見出せない状況下、戦後精神を嚮導する趣がありました。

ここに問い質さんとするキリスト教は、賀川豊彦らにみ

られる「民主主義の宗教」を言挙げする占領行政の一翼を担う潮流ではなく、日本国民たる我を場にしてキリスト教信仰の原点に身をよせたキリスト者の存在です。これらキリスト者は、日本と日本人を凝視し、日本の明日に思いをはせております。この日本によせる目こそは、新渡戸の下で身につけた開かれたナショナリズム、日露戦後国民としていかに世界の「大国民」となるかとの使命感がもたらしたものです。

日露戦後社会では、大国民たるに相応しい道義力の確立を課題とした開かれた愛国心に対し、西洋の精神に優越する日本精神の勝利を強く説き、やがて国体の精華を言挙げしていくのみの閉ざされた愛国心が相互に拮抗確執しておりました。両大戦間の日本では、日露戦争後に拮抗していたナショナリズムの潮流が崩され、国体信仰に封印された閉ざされた愛国心が時とともに社会人心を呪縛していきま

す。この閉ざされた愛国心こそは、大東亜戦争下の日本を一色に染めあげ、日本を破滅の道に直奔させたものにほかなりません。それだけに敗戦という現実に向き合うには、国を亡ぼした愛国心のあり方を問う作業が求められたのです。この作業は、日本国の破滅を預言したが故に「非国民」と罵られたキリスト者にとり、開かれた愛国心を現在あらた

めて問いかけるなかに、新生日本を位置づける営みこそ信仰の証と自覚されたのです。

とくに矢内原忠雄は、一九三七年にあるべき理想の国家像から日本の現実国家の姿、その植民地支配と対外侵略にみる不義を撃ちつづけたが故に、東京帝国大学教授たる場を放擲した一キリスト者として戦争の時代に対峙しつづけた一人です。それだけに亡国日本の明日を問う思いは、戦争で失われた時をとりもどそうとする熱情にうながされ、強き愛国の至情にあふれていました。

ちなみに矢内原は、一九四五年十二月三十一日のGHQ指令「修身、日本歴史及び地理の授業停止と教科書回収に関する覚書」を「日本は全く米国の属国化せり」と告発します。植民政略学者の目には、「日本が台湾、朝鮮、満州等に行へる同一趣旨の政策にして、それよりも更に厳酷」なる処置と思われたのです。

この亡国の状は、翌正月に掲揚した国旗日の丸が盗まれ、「今日の世情なり、共に嘆くべし」と『日記』に認めたなかに読みとれます。

戦争中屢々国旗を掲揚したる反動にや、終戦後は祭日にも国旗を出す家殆ど無し。余は日本人の国家観念について疑なきを得ず。此故に余の家は祭日毎に国旗を出す、而して遂に盗まれたり。

こうした敗戦体験こそは、「国旗掲揚」を競わせた強制された愛国心の虚妄を凝視し、日本人に埋め込まれている国家観念を問い質そうとする志をかためさせたものにはかなりません。

日本亡国に思いいたす愛国の言は、敗戦を国民道義力の敗類となし、新生日本への方途を提示せしめたのです。ここには、現実国家をあるがままに受け入れて肯定することが「愛国」の業と思ひみなしてきた日本国民に対峙し、明日をいかに生きるかという根源的な問いがあります。現在問われるべきは、敗戦亡国を直視し、この痛覚からいかなる日本像が提起されたかを読みとることではないでしょうか。

二 「愛国」という問い

矢内原忠雄は、一九三七年十月一日の東京日比谷市政講堂における藤井武第七周年記念講演「神の国」において、理想を忘失した現実国家日本の不義を撃ち、結尾をつぎのように問いかけています。

今日は、虚偽の世に於て、我々のかくも愛したる日本の国の理想、或は理想を失つたる日本の葬りの席であります。私は怒ることも怒れません。泣くことも泣きません。どうぞ皆さん、若し私の申したることが御

解りになつたならば、日本の理想を生かちすために、

一先づ此の国を葬つて下さい。

「一先ず此の国を葬つて下さい」との結語は、一キリスト者として、終末論にもとづく信仰の表明です。このメッセージは、同年九月号の『中央公論』に掲載された「国家の理想」で説いた現実国家批判と重ねて読まれ、現実国家日本を亡ぼせという言辞とみなされ、矢内原忠雄を東京帝国大学教授辞任に追いこみます。矢内原が国家批判をする場合は、「国家の理想」の冒頭で、直截に表明されています。

現実国家の行動態度の混迷する時、国家の理想を思ひ、現実国家の狂する時、理想の国家を思ふ。之は現実よりの逃避ではなく、却つて現実に対して最も力強い批判的接近を為すために必要なる飛躍である。現実批判の爲めには現実の中に居なければならぬが、現実執著する者は現実を批判するを得ない。即ち現実において現実を批判することは出来ないのである。

あるべき理想の国家像から現実国家の虚偽を問い質すとき、はじめて義しき国家は可能となります。この思いこそは、キリスト者矢内原忠雄が社会科学する目の原点であり、現実世界を解析せしめたものにほかなりません。この現実世界たる日本の風景は国から追われた者の目に荒涼たる原野でした。その思いはつぎのように詠まれています。

ひたむきに国を思ひて歩みしが

到れる見ればこれの荒野か

踏み入るる途は荒野かさもあればあれ

主に寄り添ひ心足らひぬ

ここに矢内原は、「主に寄り添ひ」、「福音によりて国を救はんとする志」にうながされるまま、亡国への道を直奔る祖国日本の敗類を同時的に生き、敗戦の秋を迎えます。「荒野」に立つとの思いは、旧約の預言者イザヤに己を重ね、「眞の愛国は現実政策に対する附和雷同的一致に存するのではない。却つて附和雷同に抗しつゝ国家の理想に基いて現実を批判する預言者こそ、国家千年の政策を指導する愛国者であるのだ」（「国家の理想」という信仰者の自負にさええられたものです。それだけに敗戦の秋は、「国敗れたり」という慟哭のうちに、神の裁きと受けとめられました。

敗戦の夜に認めた「哀歌」は、預言者エレミヤを想起し、「富士の神山」をいたたく美しい日本の大地が汚辱にまみれ、国亡びんとするなかでいかに生きるかを、「皇紀二千六百年」の歴史をふまえ、民によびかけたものです。

ああ哀しいかな此の国、肇りて二千六百年、

未だ曾て有らざる国辱に遭ふ。

米機帝都の空を跳梁し、

米艦相模の海を圧し、

東京湾頭に降服を盟ひ、
日章旗慘として声無し。

(略)

天皇、祖宗の神靈と民衆赤子との前に泣き給ひ、
五内為めに裂く宜ふ。

民は陛下の前に泣き、相共に

天地の創造主の前に哭す。

神よ、我らは罪を犯し我らは背きたり、
汝之を赦し給はざりき。

(略)

エホバこの軛を負はせ給ふなれば、
我ら満足のまでに恥辱を受けん。

そは主は永久に棄つることを為し給はず、
我らの患難を顧み給ふ時来らん。

その時責たる者は責められ、
驕る者は挫かれ、謙る者挙げられん。

もろもろの国エホバの前に潔からず、
戦敗必ずしも亡国ならず。

我らは武力と財力とに恃むを止め、
むしろ苦難によりて信仰を学ばん。

かくてエホバ義しく世界を審き給ふ日に、
我ら永遠の平和と自由を喜び歌はん。

まさに矢内原忠雄は、敗戦という国辱と国難の秋をして、
宇宙の唯一絶対なる神が日本国を愛し、その貴き使命を自
覚させ、義しき道を教え諭そうとした愛の鞭、愛の懲しめ
と理解したので。この思いこそは、「二千六百年」の歴
史をもつ日本への愛を説き語り、民族の誇りを宣揚する旅
をなさしめます。旅する世界は、ナポレオン占領下のドイ
ツ国民に民族精神の覚醒を告げんとしたフイヒテの掣みに
倣い、日本国民に精神革命をうながす信州木曽福島にはじ
まる行脚に読みとることができま。

この行脚は、一九四五年十月二、三日の長野県木曽福島
国民学校における講演「日本精神への反省」にはじまり、「平
和国家論」(十一月六、七日 東筑摩郡廣岡国民学校)「日本の
運命と使命」(十二月十二日 山形県会議事堂)、「日本の傷を
医す者」(十二月二十三日 東京新橋飛行会館)、「国家興亡の
岐路」(一九四六年二月十一日 大阪中ノ島公会堂)、「基督教
と日本の復興」(一九四六年二月十二日 名古屋朝日会館)で
終ります。そこでは、米軍の占領統治をバビロン捕囚とみ
なし、エレミアの呻きに託し、あるべき民族精神を問ひ質
すなかに、日本民族としていかに生きるかが説かれたので
す。

ここには、強制された愛国心に呪縛された「民族精神」
を解析する作業をとおり、「民族精神の理想型」を生きたる

「真実の日本人、その心に偽りなき日本人」「そういふ日本人の有つてゐる精神が日本精神」像だとして提示されています。矢内原は、一キリスト者として、この日本精神の理想に生きること、国家の不義を撃たんとしたのでです。

敗戦による民族の覚醒は、まさに民族の精神を賦活し、新生日本建設への方途にほかなりません。この思いこそは、矢内原忠雄のみならず、新制東京大学第一代総長南原繁が一九四六年二月十一日に日の丸の旗を正門に高く揚げ、安田講堂で紀元節式典を挙行、「新日本文化の創造」を内外に向けて説いた姿にも読みとれます。

南原繁は、文化と国家という課題をかけた、民族の永続性と信念に説きおよび、民族の神話とか伝統というものを単純に否定するのではなく、その問題をふまえるなかに、人間の問題として、日本人のありかたを考えるべきことを説きます。日本人の弱さは、人間意識、人間性の理想の欠如、人格観念の欠如にあること。このことが特有の国体観念と結びつき、盲従を生み育てたと告発しております。

この告発は、矢内原忠雄が日本精神を問い、人格観念の欠落に思ひいたす世界と共通した日本への目差しです。この目差しは、一九四八年十月に、「終戦後滿三年の随想」として、占領下で生きる国民が「日本民族としての自信と氣品」を喪失せんとしている現状を問い質すことになりま

す。まさに民族の理想を忘失した民によせる強き憂いにはかなりません。

日本の男女が日本復興と希望を喪失し、外形的なる生活の米国化を以て人間解放と誤解し、操を屈し媚を売るならば、日本は真に奴隷の国となり果てるであらう、

この呻きこそは、内村鑑三の信仰を受け継ぐ子として、矢内原、南原ともどもに、国亡びんとする痛覺にうながされた日本への愛の証です。ここには、現実国家の媚態に幻惑されることなく、民族の子として、高き理想をかけた、新生日本建設をめざした愛国者の至情があります。

三 神観への挑戦

長野県木曽福島国民学校における講演「日本精神への反省」は、「此の度戦争終了後私の第一声を揚げしむる名譽、若し名譽といふことが出来るならば、それは長野県の木曽福島であるのです。谷は夕暮が早くて夜明が遅い所でありますが、太平洋戦争終了後の新しい日本の黎明が、少くとも私に関する限りは長野県の木曽から始まる」、との第一声冒頭にこめられているように、「木曽路はすべて山の中である」と語りだす島崎藤村の『夜明け前』を意識した問いかけです。矢内原忠雄は、座敷牢のなかで「お天道様」

を見ることなく狂死した平田門国学者青山半蔵が体现しようとした世界を凝視し、日本精神とは何かを質そうとしま
す。

矢内原忠雄は、すでに一九三三年に「日本精神の懐古的
と前進的」で、時代の潮流をになう吉田熊次、田中義能、
紀平正美、安岡正篤らの論調を検証し、「国民の道德觀念
宗教觀念が国家的民族的段階に低徊する」現状を問い質し、
「我が国民思想の特殊性はその道德性と宗教性に見られる
のである。これを徹底せしめ、これを展開せしめよ。これ
を宇宙的道義の尊嚴の認識、宇宙的神の權威への尊敬と服
従にまで拡大、深化せよ。我国国民思想の危機に際して所謂
精神作興を訂る所以の道は、之れ以外には無いと私は信ず
る」と説きました。この日本精神を視る目は、戦時下に本
居宣長の著作にとりくみ、松岡静雄等の研究に学ぶなかで
深められたのです。その成果が木曾福島講演にはじまる民
族覚醒を説く基調となっています。

民族精神は、明治維新の復古革命にみられる「保守的に
本質の顕揚」と「歴史を通して固有の民族精神」に「新し
い生命、新しい解釈、新しい力を賦興」する「進歩的に啓
示の進歩」との二つによって展開していきます。この「民
族精神の理想型」を生きたるは「真実の平民」です。「平
民」とは、「何等社会的裝飾なくして、蒼天の下、大地の上、

一人で頭を真直に立ててゆく事の出来る人間」、「人間一人
として、所詮男一匹或ひは女一人としての価値だけで立つ
てゐる人間」をさしています。

かかる平民が具現する民族精神は、「民族精神を生きた
のみならず、之を組織的に説明する能力をもつてゐる」「真
実の学者」によつて、解き明すことが可能です。この「民
族精神の理想型」を生きた「真実の学者」には、国学の四
大人、荷田春満、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤をあげ、
宣長こそ「日本精神に対する純情的に熱情に於ては」第一
人者と位置づけれます。その学問は、「机上の学問」ではなく、
「非常なる熱情を以て、彼の学び得ただけの学問を全部用
い尽して、撥乱反正の精神を以て戦つた戦ひの器」とみな
されます。まさに本居宣長こそは「日本精神の一つの理想
型」を体现して生きたのです。

かくて矢内原忠雄は、宣長が説く、「神ながらの道」に
こめられた「日本固有の民族精神」に果敢に挑みます。こ
こに問われた「日本精神の特質」は、「人為人工を排斥して、
自然のままを貴」び、「素朴純真な自然のままの生活を愛」
で、「古き書に伝へられたる事実をば、その通り信じ受け」
ついできた世界です。そこに展開した日本人の信仰は、平
民が神の祠の前に跪いて祈願する「敬虔なる感情」をふま
え、清浄、淡泊、簡素素朴にして、偶像礼拜も比較的にな

ないものとみなされます。

しかし「神ながらの道」に託された宣長の神観は、禍津日神と直毘神の働きに説かれたように、「善も悪も有て、その徳のしわざも、又勝れたるもあり、劣れるも有り、さまざまにて、さらに一準に定めがたきもの也」と『くず花』が神を位置づけているように、曖昧無秩序なものと論断されます。まさに宣長の神観は、神を「神代の社会の自然のままの状態に於て見た」が故に、「絶対者としての神、及び人格神としての神を把握してゐない事」が、その「最大の缺陷」とみなします。

このような宣長の神観にみられる「曖昧且つ素朴である事」は、「自然的な安易な現狀是認論となるのであり」、「安易な現狀是認の思想」を生み育て、「理想に向かつての追求、真理に向かつての探求といふ眞の意味の宗教的若しくは哲学的な熱情を抑へてしまふ」ことになります。この現狀是認は、「物事大やうに、ゆるさるる事は大抵はゆるして、世の人のゆるやかにうちとけて、こころよく娛む」（『玉くしげ別巻』）と説かれたような罪悪感になつたのです。矢内原はこうした安易な現狀是認に至る宣長の人間観を告発してやみません。

なぜ宣長の人間観に人格的観念が乏しいかと言へば、彼の神観に人格神の観念が乏しいからであります。凡

ての点に於て人格的観念に稀薄であるからです。人格観念が稀薄だから個性が缺乏しております。それ故に責任観念は成り立たない。人の罪は禍津日神のしわざだ。それで以て罪に対する個人の責任の問題は不問に附されてしまふ。回避されてしまふのであります。

矢内原は、宣長の死生観にいたるまで問い質し、その「素朴な宗教観念、素朴な人生観、素朴な社会観しか見出す事が出来ないといふことは、まことに残念なことと思ふ」となし、「結局宣長の見た信仰心といふものは人間的な氣持に過ぎない。彼の見た神といふものは人間的な神、否人間である。彼の見た国はありのままの人間の国である」と結論づけます。かかる日本精神の因子こそは、現狀是認の下、現実の人間の状態、現実の社会の狀態に引き下げ、絶対者たる眞の意味の靈的存在に、目を向けて生きること否定したのです。

かかる日本精神がはらむ「功罪共に宣長の思想の中からでてをる」世界にはかなりません。それだけにこの日本精神に総決算をうながしたのが敗戦という現実です。まさに敗戦は、「神ながらと言ひながら実はその人の主観そのものであり、私心を去ると言ひながら実はその人の私心そのものである」という世界がもたらしたもののだけに、神観の敗北であり、思想的道徳的貧困によるものにほかなりませ

ん。

かくて「日本精神を嗣ぐ者」は誰かと問い質し、「今日日本精神を反省して之を立派なものに仕上げる力は、基督教である。私はそう信ずるのであります」と応じたのです。矢内原忠雄は、その理由として、第一が「基督教は真理であり、基督教の真理が日本精神の真理を生かしてゆくものである」こと。

第二が「基督教の教と日本精神との間には脈略がないものでない。私が日本精神の長所として挙げました信仰的といふこと、之が基督教の生命とする立場であるのです。次に霊的といふ事」となし、次のように説きます。

宣長の言つた産霊の神の働きは純粹に霊的とは言へません。物質的な要素を多分に含んでをりますけれども、それでも産霊の神の働きといふ思想を洗練してゆけば、霊的な素質を有つてゐるのであります。之は基督教の霊的な信仰に通ずるものである。それから私心を去つて神の御心によつて生きるといふ、之もまた基督教の生命とする考へ方であるのです。信仰的であつて霊的であつて私心を去る。そういう点に於て日本精神の長所美点を生かして育てて行くものは基督教の畠である。基督教といふ畠に移し植ゑるならば、日本精神はよく育つ。今迄の畠にそのまま生えてゐたのでは苗は成育

しない。喩へて見ればさうであります。

一方、真理に対する愛、人格的な責任觀念、善惡正邪に対する鋭い感覺、罪惡に対する徹底的な態度。かういふものは日本精神に十分備はつてをらないものであつて、基督教に於て非常に深く示されてゐる事柄であるのです。それ故に日本精神の美点を生かしつつ其の缺陷を補ひ、之に新しい生命を與へて展開する力は基督教に在る。

この言は、採長補短の論であり、我田引水と聞えるかも知れませんが。しかしここに至るまでの思考は、戦争下の荒野に一人立ち、異邦人たる思いで崩落する祖国日本の前途に思いをはせた一キリスト者が時代思潮をおおいかくした日本精神なる世界と対決して手にしたものです。まさに本居宣長の原点を抉り出し、その神觀にひそむ現狀是認の精神を解析しています。この現狀を是認する精神こそは、現実国家に目を奪われ、その追認を「愛國」の業と思ひみなし、国家の理想に思いをはせることなく亡びの道を歩みめたのです。

かつ人格觀念の欠落は、幼き神觀の由とする論に、「日本人の弱さは、人間意識・人間性の理想の欠如、人格觀念の欠如」と指摘した南原繁の思いが重なります。ここには、内村鑑三の下で信仰を身につけた者が共有する世界、一日

本人としてイエスの福音を生きようとした思いがあるのではないでしょうか。

この思いこそは、敗戦で心奪われた国民に、日本精神が担うべき新たな意義を付与し、絶対的人格神にもとづく倫理への目を開き、道義国家建設をうながします。そのため木曾福島講演は、終戦を告げる天皇に応じ、「陛下が信義を重んじ、平和国家の確立に邁進するといふ事を仰せられました」が、私は日本精神の理想型としての天皇の御心として、この御言葉を伺ったのであります」と結びます。

「日本精神の理想型」を確乎たるものにするには、本居の神観を革命し、日本人の神観を唯一絶対神に付らなる人格神にせねばなりません。矢内原は、その方策として、皇室に神観覚醒の起爆力を期待し、皇太子の御進講に応じようともしました。しかし御進講は、「信仰の話」ではなく、「英国家植民政策」談をせざるをえませんでした。

矢内原忠雄は、一日本人キリスト者として、日本人の神観の根を解析することで、日本精神が描き出した世界の虚実を明らかにしました。ここに問い質した日本精神は、矢内原の目に映じた世界ですが、いまだに覚醒されることなく、閉された愛国心の原器としてうごめいています。それだけに現実国家に託す目ではなく、国家の理想を問うなかに精神のありかたを問い質すことが現在ほど求められてい

る秋はありません。

理想なき国家の姿は、敗戦の日以上に、亡国の状を呈しているとの思いにとらわれるのは私一人の僻言でしょうか。

〔後記〕

矢内原忠雄の学問と信仰、天皇と天皇制、神社のありかたについての所見は、

拙著「矢内原忠雄の目線―矢内原忠雄にみる日本精神」（無教会研究 聖書と現代）第七号、二〇〇四年、無教会研修所）

若き日の矢内原忠雄の精神の軌跡、御大葬と殉死をめぐる心のゆれうごき、明治天皇によせる「明治の子」たる姿については、

拙著『及本希典』（河出文庫、一九八八年）
また日本人の戦中・戦後体験については、

拙著『日本人と戦争―歴史としての戦争体験―』（刀水書房、二〇〇二年）、「歴史としての戦中・戦後」（『北の丸―国立公文書館報―』第三十五号、二〇〇二年）を各参照。

（北海学園大学教授）